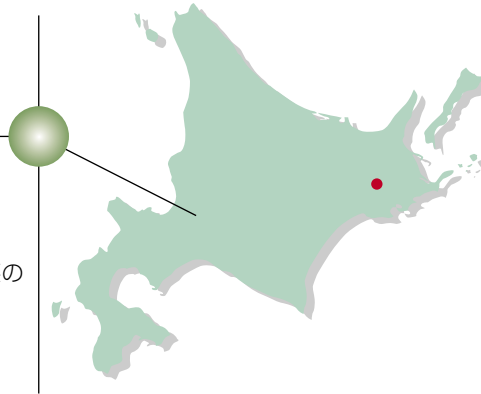


栗山町

栗山町
 面積：203.84km²
 人口：14,847人（平成12年国勢調査）
 町の花、木：ゆり（花）、くり（木）
 町名の由来：アイヌ語の「ヤム・ニ・ウシ」＝栗の木の繁茂しているところ
 ホームページ
<http://town.kuriyama.hokkaido.jp/>



栗山町総務部企画課
 企画調整係長

高間 嘉之

「町民主役のまちづくり」～元気なまちですね！

栗山町は空知管内の最南部に位置し、東は夕張市、北は屈足山系をもって栗沢町に境し、西南は夕張川を隔てて由仁町及び長沼町と接し、気候は冬は温順寒冷で春から夏にかけては温暖で乾燥し、秋から冬にかけては比較的雨量・積雪量とも少なく気候条件に恵まれています。

また、札幌市、新千歳空港、苫小牧港から各40分という立地条件から、交通の要衝として経済・文化の進展を続けています。

まちの歴史は、明治21年、宮城県角田藩士が夕張開墾起業組合を設立し開拓が始まり、明治23年、角田村と公称され、その後札幌農学校夕張学田地の設定や、貴族などが相次いで農場を創設し、今日の農業生産地、栗山の基礎が築かれました。昭和に至り、角田炭鉱の発展とともに、人口は20,000人を突破し、昭和24年、町制を施行、同時に名称を栗山町と改め、昭和38年には人口が24,500人を迎えピークを迎えましたが、その後全国的な農村地域の過疎化の進行と角田炭鉱の閉山などにより減少の一途をたどっています。

基幹産業である農業は、米を中心に小麦、ジャガイモ、メロンなどを含め道央圏の食糧基地として大きな役割を果たしています。

工業については、食品、木材、鉄工の他、エレクトロニクスなどの先進的な業種も含め多くの企業が進出しており、また、商業においても南空知の中心地として、商店街近代化の推進など、魅力あふれるショッピングゾーンを形成しています。

また、近年では、コンサドール札幌なども練習で訪れるふじスポーツ広場や野球場、パークゴルフ場などの整備を行い、「スポーツ元気都市くりやま」として、多くのスポーツ愛好者や青少年が町内外から訪れ、まちは賑わいを見せています。

人と自然にやさしいまちづくり

栗山ならだいじょうぶ

少子・高齢社会の到来に対応すべく、栗山町は早くから「栗山ならだいじょうぶ」をスローガンに全国に先駆けて福祉のまちづくりに取り組んできました。

ひとり暮らしの高齢者を一般家庭に招き若い世代との交流を深めるいきいきホームステイ、体が不自由でも自宅で生活できるように住宅改造のアドバイスを行うリフォームヘルパーの配置、高齢者痴呆対策のためのいきいき健診、育児に関する相談を受ける子育て支援センターの設置など、地域福祉の向上に取り組んできました。

また、昭和63年には全国初の町立の介護福祉士養成校である「北海道介護福祉学校」を設置しました。

開校により、町に常時160名の若者が通学・居住することとなり、学生は地域ボランティア、イベントなどで町民とふれあい、まちの活性化に欠かせない存在となっており、就職率も100%を誇り、卒業後は全国の福祉施設で活躍をしています。

地域通貨・エコマネー

近年の急激な核家族化や価値観の多様化により人とひとの「結びつき」や「ふれあい」などコミュニティの空洞化が起き始めています。

これらの地域課題解決のため、町民と行政がパートナーシップにより、心とこころが通じ合う価値観を共有しつつ、栗山だからできる「新たな地域社会の創造」による地域コミュニティの再生を目指し、地域通貨・エコマネーの試験流通を開始しています。

エコマネーとは、エコノミー（経済）、エコロジー（環境）、コミュニティ（地域社会）、マネー（お金）の4つの言葉をもとにした造語で、お金（円）だけでは表せない人の優しさや善意を同一地域内だけで流通させるための通貨のことです。

この取組みは、町民有志による研究会と行政とが協働しながら現在3回にわたり試験流通を実施し、700名を超える町民が参加をしています。

20年後の森づくり

本町の御大師山の山麓「栗山公園」として、多くの町民の方々の憩いの場となっています。その御大師山で、昭和60年「国蝶オオラサキの生息が確認された以後、オオラサキをはじめ、いきものたちの生息を保護する住民活動が活発となりました。

平成元年に御大師山一帯が、環境庁の「ふるさといきものふれあいの里」に指定され「ファープルの森」として様々な昆虫や鳥などが住みやすい森づくりが始まりました。

平成11年には、隣接するハサンベツ地区(アイヌ語でハチャム・ベツ:桜鳥・川)で自然と農業と人が共生する里山、ふるさとの川として再生、創出していくことを目指し、町民が主体となり知恵と労力を出し合っ、将来の子供達のために、自然と人が共生していく20年後の森づくりを進めています。



「20年後の森づくり」に関連する「ハサンベツ里山計画」のシンボル看板です。

次代へのまちづくり

あたらしいまちの顔

かつて、駅前周辺は町の玄関口として、また、南空知の中心商圏として発展してきましたが、炭鉱閉山などにもなう過疎化、モータリゼーションの普及など社会情勢の変化から衰退の一途をたどりました。

このため、平成5年度から、市街地において本町の顔にふさわしい魅力あふれる交流ゾーンの形成を目指して、JR栗山駅周辺整備事業や駅前広場整備事業、角田通整備事業などが北海道、町、地元関係者によって進められてきました。

駅周辺整備事業と駅前広場整備事業は平成13年に完了し、電線類の地中化やバリアフリー化による景観に配慮したひとやさしいまちづくりにより、あたらしいまちの顔としてかつての賑わいをとどめています。

また、今年度からスタートする角田通整備事業(2期地区)は市街地のメインストリートである角田通りのJR栗山駅から中央通りまでのくりやま駅前通り商店街区間(1期地区)に引続き、中央通りから国道234号までの区間の整備について、周辺で展開している各種市街地整備事業との連携を図りながら、地域の現状を生かした景観の形成をはじめとする沿道環境の整備を図ることを目的として、地元住民が自らの地域づくりについて「角田通まちなみ整備基本計画」を策定し進められようとしています。



「あたらしいまちの顔」となった「くりやま駅前通り商店街」です。

情報化社会への対応

情報通信技術やコンピュータ技術の飛躍的な発展により、多様で迅速な情報伝達が可能な高度情報化社会に対応すべく、栗山町では「いきいき交流プラザ」を情報化の拠点施設として、各公共施設・学校等を光ファイバーで接続し、インターネット技術を利用した地域高速LAN(地域イントラネット)システムの構築を目指しています。

行政、福祉、教育、保健等に関する生活に密着した情報を光ファイバーで接続された各公共施設等の端末やインターネットを利用して自宅からのアクセスも可能であり、距離や時間に制約されない最新の情報提供と電子メール・掲示板等による双方向の情報交換が可能となり、情報の共有化による町民と協働によるまちづくりを行います。

最後に、栗山町の産業情勢も経済不況、農業情勢の悪化、町財政の緊縮などにより近年、倒産等も相次ぎ大変厳しい状況が続いています。

そのような中で、「栗山町は元気がありますね。」とよく耳にします。

栗山町では福祉自然スポーツなど様々な分野で、住民が行政と協働でまちの将来を考えながら活動を展開していることが「元気がありますね。」との言葉の要因と考えます。

住民主役のまちづくりが、いかに実践されるかが今後のまちづくりのキーワードではないかと考えます。